

梅原猛氏の死を悼む

2019.1.14

ところざわ倶楽部 地球環境に学ぶグループ 小嶋一郎

1月14日私が尊敬する哲学者が12日に亡くなったことを知った。先生は93歳とは言え、誠に残念に思い寂しさに感じ入っております。

私は大学時代に先生の哲学、歴史、文学に感動して、多くの著書を拝読しました。好奇心旺盛で哲学にも興味を持つ私は日本の歴史、生き方また自然科学について哲学者梅原猛先生から多くを学びました。先生は2013年に「人類哲学序説」(岩波文庫)を出版されこれが最後となってしまった事は残念です。

私は大学では機械工学専攻、社会人になってからは、造船、宇宙開発に従事、理系の道を歩んだ一人ですが私の考えには先生の思想が流れています。

ご存知2011年(平成23年)3月11日未曾有の東日本大震災を経験しました。安全神話での自然災害について疑問を抱いていた折、哲学者梅原猛と哲学者東浩紀の二人の哲学者の対談を聞きました。原発事故は「文明災」、これを機に復興を通じて新文明を築き世界の模範なる機会を築きましようと呼べた梅原猛先生の言葉が一番印象に残っております。

もう古い話になりますが先生の死を悼んで、感銘した対談について私の考えを含め以下にそれを整理したものです紹介いたします。

—2019.1.14 小嶋再編集—

86歳新たな哲学に挑む

哲学者梅原猛と哲学者東浩紀(40歳)の対談

- 東日本大震災を経験して、今一度日本と言う国はどうか、どう進むべきかを語る
- 今こそ、自然と共存する日本古来の文化に立ち返り、現実を見直す機会であることの提言
- 私が尊敬する二人の哲学者はこの度の悲惨な大震災に直面して、哲学者の目から、日本の歴史的観点からの考察を含め日本の現状、今後を厳しく見ている。原子力災害の悲惨さを改めてこの対談から理解し少しでも今後の日本の立ち位置、方向性を考える糧としたい。

注:NHK こころの時代～宗教・人生～ シリーズ 私にとっての“3.11” 「86歳 新たな哲学に挑む」より

—2012年4月 小嶋の編集記—

—哲学者東浩紀さんの哲学を語る会での話

復興の提言も経済学的資産だけがおどろ、文化的な深みがない。この国は今本当にまずいのではないかと危機感を募らせている。

2011年3月11日地震、津波と言う東日本大災害に遭った。そして福島原子力発電所ではメルトダウンが発生し放射能漏れを起こした。

原発をどうするのかについて数字の問題にしか語れない。日本と言う国はどういう国なのか、日本人はどの方向に進むべきか、そもそも私たちはどういう遺産を受け継いでいるのか、大局的議題をほとんど解決出来ない。それは我々の世代のものだけでなく団塊の世代以降のすべての知識人が持っている欠点と思うと東さんは考える。

—震災後、私達はどのように生きて行けば良いのか。

梅原さんは原発に象徴される現代の文明の在り方、それ自体を変えねばならないと強く主張して来

た。梅原さんは、この災害は天災であり、同時に人災の面もある、その程の差ではなく文明災であると考える、文明が災害を与えたと考えている。

その文明が原発を使って人間の生活を豊かにし便利にして来た。そういう文明がまさに災にあった。今文明が裁かれていると思う。新たな文明の原理として日本古来の考えが活かされるべきと訴え続けて来た。日本の文化の原点の中に西洋哲学の行き詰まりを解決する。この行き詰まりを解決し、そして新しい人類の指針になる思想が潜在しているのではないかと、自分の運命の原理で持って科学技術文明をその中に考える。そして新しい文明を考える。

東さんは、人と人とのつながりが薄れる中で、どのように新たな繋がりが作れるのかの可能性を探って来た。梅原さんは最近、太陽について考えていると言う。エジプトはかつて太陽神であったのにギリシャ以降太陽がない。それ以降人間は太陽を忘れていたからまずいのではないかとやっている。そこでこれからは太陽なのだ話す。太陽エネルギーだとの話になって、これはスケールの大きいものが来たと思った。

今回の震災はまさに千年に一度の震災で、それで初めて今百年千年の単位でものを考えることが必要になった。その時に私の世代の言論人はそれに対して備えが足りなかった。そこで梅原さんのような千年単位で文明について考察されている方、そして日本論についても優れた業績を残された方に一度新たに教えを乞うじたいという気持ちで、東さんは東山の麓、自然豊かなところにお住いの梅原さん宅を訪ねた。

一 梅原哲学

梅原さんは、この一年間考えて来たことについて語り始めた。この震災が私の哲学を語る原因になった。これまで私は、自分の哲学と言うものが出かかっているので語ろうと思ったのだけれど、もう一つ勇気がなかった。ところがこの大震災で、そしてこの原発事故を経験してこれは現代文明の災いではないかと！

今日のヨーロッパ、世界の先進国のほとんどは原子力エネルギーを何パーセントか文明のエネルギーとしている。その文明そのものが今問われている。そういう風に思って、私も 86 歳ですから、思い切って自分の哲学を語ろうと言う気になった。

私は戦争に行った世代です。最後の戦中派です、入隊したけれども輸送船は沈没して戦地に行けない、本土防衛隊となった。この戦争で多くの先輩たちが死んだ、私は入隊したら必ず死ぬと思っていた。それ以来、死と言うものをずっと考えていた。そして私は哲学を一生の仕事にしようと思って、京都大学で西田幾太郎哲学を学んだ。哲学とは何ぞや、人間、人類はどう生きたらよいか、そういうことを考える学問である。

終戦後西洋哲学を学び始めた梅原さんは、環境問題等現代文明が抱える多くの課題に、西洋哲学では答えを出せないと考えるようになった。

40 歳くらいになって、西洋哲学に見切りをつけ、日本文化の研究に乗り出した。縄文文化、古代史、神話、仏教などの研究を通して日本人の古来から持っている思想の中に現代文明の持っている矛盾を解決する答えを探って来た。この仕事は梅原日本文学と呼ばれる。

この大震災後、梅原さんは政府の東日本大震災復興構想会議に唯一の哲学者として参加した。梅

原さんの発言は脱原発の議論をリードした。

この災害は天災であり、同時に人災の面もある、その程の差でだけではなく文明災であると考え、文明が災害を起こしたと訴えた。

これまで先進国は原発を使って、そして人間の生活を豊かにし、そして便利にした。そういう文明がまさに災に会った。今文明が裁ばれていると考える。その裁きに対してどう答えを出すか。

これはエネルギーの問題、太陽光や風力というエネルギーの開拓と同時に、人間の文明が変わらねばならない。そしてこの原発事故を文明災と位置付けた梅原さんはその後、現代文明のベースにある西洋哲学を一から洗い直すことを始めた。そしておよそ 400 年前に唱えられたある考えに問題ありと言うことをこの度確信した。

一人間中心主義

17世紀フランスの哲学者ルネ・デカルトが唱えた“われ思うゆえにわれあり”、デカルトは世界で唯一確かなものは考える自分自身であるとした。一方目の前にある自然は数式に置き換え、容易に支配出来るものと考えた。人間は自然の上に立つというデカルト哲学のもと、科学は発展し産業革命が起った。しかし同時に環境破壊を初め、大きな問題を引き起して来た。人間中心主義である。デカルトは”われ思うゆえにわれあり”、我が世界の中心であると！

そしてこれに対する自然は対象とする世界で、自然科学的法則によって、数学的法則によって理解出来る。そう言う数学的法則によって自然の法則を繋いで行き、明らかにすることで人間は自然を支配出来ると考えた。科学技術文明を作って自然を支配し、人間支配の”意志の文明”を作った。そのような意志の文明では人類は自然破壊、人間破壊に繋がる。

一自然と共存する思想“草木国土悉皆成仏”

そのような文明の権化が原子力ではないかと思う。そういう西洋哲学の原理を超える、現代文明を超えるような新しい文明の原理が日本の思想の中に潜在しているのではないかと考える。西洋哲学では人類は存続出来ないと梅原さんが新たな文明の原理として打ち出したのが、日本の古来からある、自然と共存する思想、それは“草木国土悉皆成仏”と言う仏教の言葉に象徴されると言う。草木も土も風に至るまで、地球上のありとあらゆるものに仏が宿る。人間と同じように魂を持つという考えです。

人間だけが特別な存在だけでなく、すべての物が地球の一部に過ぎない。この思想は縄文時代以来、日本人の考えを受け継いだものと梅原さんは考えている。日本の思想の原点“草木国土悉皆成仏”と言う形の思想で表現出来るのではないかと考えている。それはその草や木も国土、石が国が煩惱を持っていた生き物である。それらは仏性を持っている、成仏出来るのではないかとする思想です。植物中心の世界観じゃないかと、この様な考え方は生態的にも動物は植物の寄生として生まれた。

一宮澤賢治の世界

私は宮澤賢治の世界にも、この考えを見る。木がものを言う、そして木は人間と同じように愛や悲しみを持っている。この“草木国土悉皆成仏”を具体的に表現したのは宮澤賢治である。山猫、くま、イチヨウ、蓼、雪など地球上のあらゆるものを主人公に詠った。中でも梅原さんが注目するのは“イチヨウの実”(最後のページに添付した)の童話です。

地球上のあらゆるものが人間と同じように感情をもつ、植物が意志を持っている動物的思いとだい

ぶ違う、植物を中心にみて、そして植物と言うものは多様性を持っている。やはり植物が共存する、植物が意志を持っている思想と動物的思想とはだいぶ違う。やはり共存する意志、そういう植物中心の世界観、私には近代思想と言うのは、近代は天動説から地動説に変わったと言うけれども哲学としては地動説じゃないかと考える。人間のまわりをずっと回っている。そういう人間中心主義的哲学はむしろ生きとして生きるものが存続すると言う“草木国土悉皆成仏”の思想に帰られねばならないのが一つです。

一国歌“君が代”

君が代という歌はなんだろうかと言うと、本来あれはあなたの命は小さい石が大きな岩になって苔が生すまで長生きしてくれと言う歌なのです。君が代にある、さざれ石とは小さな石のこと、それが大きな岩になるまでと表現した国歌にも“草木国土悉皆成仏”の思想が込められていると梅原さんは言います。人間の命を例えるのに石ですね、石もまた生きているのだ、小石がだんだん大きな石となって、石も生きているという考え方です。

一日本の若者文化にも“草木国土悉皆成仏”は生きている

東さんは言う、梅原さんの“草木国土悉皆成仏”と言う発想と言うのは、全く別の形で、日本の若者文化にも生き続けていると言うことが出来る。東さんはフランス現代思想など西洋哲学の研究からキャリアをスタートさせて来た。しかし哲学だけでは身近な問題を解決出来ないとオタク文化など日本社会の研究を重ねて来た。日本の今の若い人達の文化は、すごく無生物に対する愛と言うものが、ある意味溢れている。現実には存在しないと言うキャラクターに、ずっといかにもまるで人かのように扱い、愛でられている。それがこの世界の中でもすごく珍しいものとして発展して来ているのだと思う。そういう意味では先ほどから梅原さんの言って入る“草木国土悉皆成仏”みたいな発想と言うものが全く別の形で今の日本の若者の文化に生き続けていると言うことが出来る。

日本でのロボット産業、日本ではロボットに意志があるように造る。ものには魂があると言う思想とされている。西洋、ヨーロッパやアメリカの技術者はやらないとよく言われている。そのものに魂が宿ると言う発想は、思想としては語られないけれど実践として日本の文化に生き続けている。

一永劫回帰

今日梅原さんがもう一つはっきり言いたいことは“永劫回帰”と言うこと。今が良ければ良いと考える近代文明、それに対して梅原さんはもっと長い時間で考える必要があると考える。

自分の命は過去から受け継がれたものであり、自分の先にも命が続くと言う、“永劫回帰”と言う思想です。この地球上で命がずっと続いている、感じることは自然に対する畏敬の面に繋がると梅原さんは考えている。

アイヌの人々は、自分達の生活に必要なとするもの以上は収穫しない。イヨマンテ(熊送り)と言う儀式は、狩りで捉えた小熊を神の使えと考え、一年近くご馳走を与えて丁重にもてなす。その後小熊に矢を射かけ村を上げてあの世に送る。それによって生き物への敬意と感謝の面を心に刻むのです。梅原さんは自然と共存しようとする思想が深く根付いていることに驚いた。

狩猟、採集文化は生き物と共存する文化、アイヌは木を伐れば必ず接ぎ木をして、そしてどうか神様、私の家を造るためにこの木を伐りました、頂きました。どうかまたその木が同じように育つようにと神様

にお願いしていた。

もう一つ梅原さんは子供の頃田舎に行って山寺でよく蟬を採って遊んだ。私は今孫を連れて蟬を採ったら孫は私よりたくさん採る。それを私は見て、孫が回帰して来て、蟬の何十年後の子孫を採っている。そういうのが“永劫回帰”じゃないかと考える。そのことが人間と自然がずっと永劫に交わって行くという、私どもの命と言うものは原始的な生命から脈々と伝えられている生命、その生命がまた未来永劫に続いて行くのです。その生命を与えてくれた自然に対する深い畏敬の念こそが文明の中心にならなければならないと強く感じている。

－日本はある意味では、実存主義的社会になっている

お孫さんの話を聞いて東さんは言う。実在的に生きると言うことは社会から離れて孤独になると人々と思う。日本はある意味では、実存主義的社会になっている、みんな家族のつながりとか世代のつながりと言うものをバラバラに切り離されて、今生きている時代となっている。そこで本当は思想とか宗教とは世代的つながりと家族のつながり、地域とのつながりを守るために無ければならないものと思っているが、残念ながら日本にはそれがなくて、どんどん国がバラバラになっている中で、今の思想の力点を個人の実在ではなく、世代のつながりの側に移そうと言う梅原さんの提案は強いメッセージになって行くような気がする。

－人類共通の哲学、古代エジプト文明、太陽神(ラーの神)

自然と共存する“草木国土悉皆成仏”の思想それは人類共通の哲学になると考えている。それを梅原さんが確信したのは、エジプトでのフィールドワークであった。

エジプト文明、そこには太陽と水の文明があることを知った。エジプトは農業神、農業国、ナイル川が増水し広がってそこに太陽が当たって小麦が育つ、そこで一番大切にされるのはラーの神、太陽の神、太陽崇拝、そして水である。

日本の仏教でも一番の中心的神は大日如来、そして一番崇拝されたのは観音様です。仏様は観音様、観音様は明らかに水の神であった。太陽と水の神、仏は日本の神様の中心であった。それはエジプトと同じように農業神。梅原さんは自然と共存する思想、太陽と水の文明はエジプト文明に続くギリシャ文明で失われたと考える。ギリシャやユダヤを訪れた際、そういう神が喪失してしまって、森がはるか昔に破壊されたことを知ったからです。太陽と水の思想と言うものを、私はギリシャやユダヤでは、神は喪失してしまっている。梅原さんは自然と共存する思想がエジプト文明に続くギリシャ文明で失われたと考えている。

ギリシャは海賊国家である。海賊で支配して植民地を乗っ取って生きて来た国家である。そういう太陽や水の恵みを忘れた文明、それをずっとやって来て近代文明になった。その流れが原子力と言う大変なものを発明して、そして現代文明は原子力をエネルギーの根源として使っている。

－脱原発

脱原発の動きは世界中に広がっている、時に自然エネルギーに帰って来る。そのエネルギーの問題にしても太陽を中心としてのエネルギーが再考されて来ている。

それはエネルギーの問題ではなく宗教の問題ではないか、思想の問題、太陽崇拝、水の崇拝を人類が獲得しなければそこへ帰らない。そうならなければ人類は存続出来ないと言う気持を今強く持って

いる。

一怒る自然との共存とはどういうものなのだろうかを梅原さんに問う

自然と共存を訴える梅原さん、それに対して東さんは震災地で目の当たりに見た自然の恐ろしさについて訪ねた。怒る自然との共存とはどういうものなのだろう。

普通に考えれば津波と地震に対してコントロールしなければならないとする発想があるが、今回原発事故が発生して、すべてみんなが脱原発と言っているのではなく、起こったことに対して、より技術力を高めるとい主張も多いと考える。そういう形で自然が怒ったからこそ、もっとコントロールしなければならないという発想があると思うがそれに対して梅原さんはどう考えますか。

日本の神道の本質は自然の恐ろしさから出発している。だから自然の恐ろしさにいろいろ奉げものをすることによって恐ろしい自然を恵みの自然に変えて行く、自然は一面怖い暴君のような恐ろしさを持つ。一面慈母のような優しい面を持つ。この二面を西洋の文明は忘れていた。自然の恐ろしさを忘れていた。手を付けられない恐ろしさを忘れていた。もう一回恐ろしい自然、これを例えて言うと富士山が噴火することは十分考えられることである。それに対する備えを考えておく、その備えとは自然が怒っても大丈夫にするという生活スタイルを作って置くこと、そしてそれをいつも覚悟する。それが日本の自然観である。

20世紀に入ると科学技術文明は原子力など人類の存在を脅かす問題を生み出した。西洋では多くの哲学者はこの問題について解決策を探って来た。20世紀最大の哲学者と言われるマルティーンハイデッガーは原子力技術の背景には自然を人間の役に立つものとしか捉えない考え方があると批判した。そこで詩人のように自然の本来の姿を見ることが大切とした。ハイデッガーはまさに梅原さんが言うようにギリシャヘブライ以降の人間中心主義の哲学の完成形態としてあって、そこからどう抜け出さなければならないかと考えた。ヨーロッパでも、ある種の自己批判があるが、やはり人間中心主義を克服出来ない。これは大きな問題である。

二人はハイデッガーも自然と人間とを分けて考える限り、人間中心主義から抜け出していないと考えている。人間中心主義と言うか人間と自然とをかつちり分けて人間だけが主体で自然は客体であると発想するのは、科学を可能にした発想だけで、これ事態は何の科学的根拠にもないし、実際、現代科学の知見をいろんなところで否定している。

人間だけが主体であると、人間と自然はきっぱり分かれるという世界になっていないので、科学の最先端のことが明らかにした知見を思想的に理解するためには、実は科学の最初にあった主客の分離と言うか人間と人間以外のものの分離みたいな前提を変えなければならない。

それに対して梅原さんは世阿弥に白楽天と言う能があると言う。人間が主体であると言う西洋哲学の限界を乗り越える思想として梅原さんが注目するのは能の白楽天です。

中国の詩人白楽天は日本人の知力を試すために九州にやって来る。白楽天は中国の詩の素晴らしさを語ると迎えた住吉明神は和歌について説明する。中国の詩は人間だけのものだが、日本の和歌は人間ばかりか、うぐいすも、かえるも、涙さえ詠むことが出来る。白楽天は降参して中国に帰って行った。

梅原さんはここに人間と自然を分けない日本独自の思想を見出している。雨の音も風の音も波の音

も詩だと言う。そういう詩は人間だけを詠う詩より上だと教えて追い出した。詩と言うものはまさに自然の音も詩だと、それが本当と思う。カラスがこの庭に巣を作っている。カラスは昼はカーカーと鳴くが、夜は裏声で鳴く、その鳴き方にもいろいろあり、夫婦か親子の会話に聞こえる。

東さんはジャンジャックルソーを研究していますがルソーの言語起源論と言うマイナーなものがあるがルソーは言語の起源はうたとっている。遠く離れている人間がうたと叫びでコミュニケーションを取ったのかもとの形態で人間の言語も鳥のさえずりのようなものでそれがある条件の中だとだんだん秩序だって来て言語になった。

言語があるとないとの境界は本当はすごく小さいものかもしれない。夜鳴くカラスの声は違う。全く裏声みたいに聞こえる。それは親子や夫婦の会話のようなものではないかと思う。

そこは西洋哲学とアジアの哲学との本質的な違いではないか。

一梅原さんのお住まい

梅原さんの大変素敵なお話を伺っていますが、梅原さんの仕事も日本の伝統、文化と言うものと密接に繋がっていて仕事されている。それとおそらく京都という街と深く関係していると考えます。

京都は万葉のことを研究することにしても、古代のことを研究することにしてもすぐ行ける。京都と言う都市は一種の山村都市で、周囲が山に囲まれて、うっそうたる山なんです。

梅原さんがこの地に暮らすようになったのは、40年前静かな場所を探していた。この地は和辻哲郎が勝手住んでいたところでもある。梅原さんは足利義政を好んでいた、足利義政はこの地に銀閣寺を建てたかったが狭いので疏水の反対側に造った。その地に自分の住まいを造りました。

一日本人が今世界に果たせる役割は何か

日本はヨーロッパの科学文明に恩恵を受けたのだけれどそれにはマイナス面を2つ経験した。それは広島原爆です、それから今度の原発です。これは不思議なもので日本のように西洋文明の取り入れに成功して立派な文明を作った日本がものすごく西洋が経験しないような西洋文明のマイナス面を受けている。これは日本への教訓ではないかと、これを越えて行かねばならない。これはある種世界史的役割、これを強調したい。

かつてトエンビーとの対談で西洋は科学技術文明でもって世界を征服し、世界を一つにした。その西洋文明を取り入れない国は植民地になるかであったが、日本は大変賢い民族でその取り入れに一番成功したが、西洋文明を取入れる時代は終わった。そして新しい歴史は非西洋文明が自分の文明の原理でもって科学文明をその中で考える。そういう新しい文明を作らなければならない。作るであろうと言う事をトエンビーは予言した。それは良い話だけれど、どのような原理で日本では新しい文明が作れるかを聞いたが自分で考えろであった。それに答える時がやっとやって来ました。

一提言

西洋文明で日本は豊かになったことには感謝しなければならない。西洋でもこれには限界がある、その行詰まりを考えているはずです。そこで提言ですが、東洋文明の考え方を取入れてはどうかと、西洋に対して西洋文明は間違っていると直接には言わずに“取入れたらどうですか”と提案する。そういう思想の芽のようなものを出して、また次に来る人は私の思想よりはもっと精密な論理を作って思想を育てる。このような思想を育てることが今後の課題であり、大切である。

一私こと小嶋の考え

この対談文は、東日本大震災後ちょうど一年が過ぎた時、NHKで放送されたものを私なりに整理したものです。この対談話を出来るだけ忠実に編集、記述した積りですが、読み辛い点がある事をご容赦願います。この対談話は、今回の大震災、特に原子力発電事故に対して私自身モヤモヤとしていた点が晴れる感を得ました。以下にその点を述べます。

私は今度の原発事故は人災と考えておりました。日本は地震大国、今回の福島原発事故をしっかりと検証して技術的改善点は、日本の優秀な技術力で解決出来ると考えたが、しかし自然の怒り、猛威にどう対処出来るか、それが解決出来なければ原子力発電は大丈夫、再稼働して良いと考えられない。

その上、一番の問題は人間が関与する諸政策には不安を感じる。今回の原発事故検証処置等、その後の維持管理を含む運用システムの問題である。日本には歪んだ体質がある。この問題は簡単には解決出来ないと考える。利害関係の渦、原子力村と言われる表現に裏付けられたように、日本は安全神話のもと、大きな災害は起らない事と決めつけていて、危険を提言する科学者の意見には耳を貸さない、また当事者間にもこのままでは危険があると考えていた人はいたと思うが改善提案出来ない、言っても採りあげない歪んだ体質がある。このような我欲集団の体質改善及び意識革命をどうするかが一番の問題であると考えたが、一年経っても一向に改善の兆しが見えない。

このような社会構造を変えるには、我欲集団の意識改革が必要です。これには利害関係が伴いそう簡単には解決しないと考える。このような状況のもと今後の原発をどうすべきか思い悩んでいる時に、この対談を知った。その結果、私は原発は何とかなると言う考えから一転、脱原発にならざるを得ないと考えるようになった。

今すぐとは言わないが、脱原発方針のもとに、地球が恩恵を受けている**太陽の恵みを再認識**する概念により、太陽エネルギーを中心とした自然エネルギー利用に日本の技術力を結集すべき時が来たと考え。それには10年から20年の開発期間が必要と考える。それまでは多少は原発に頼らなければならないが、同時に古い原発から、また活断層の上に設置されているようなもの等、危ないところに設置されている原発を廃止して行くことが急務と考える。もちろんその間も日本に原発が存在する限り、より一層の原発維持技術を磨いて行く事を怠ってはならない。技術力低下はより危険性を増す事になる点は心に命じるべきである。

一度開けてしまったパンドラの箱はもうどうしようもありません。科学者にも技術者にも責任があります。他のことと違って、放射能の影響は30年、40年の長期に渡って人間、環境に悪影響を及ぼします。

梅原さんは、日本の神道の本質は自然の恐ろしさから出発している。だから自然の恐ろしさにいろいろ奉げものをする事によって恐ろしい自然を、恵みの自然に変えて行く、自然は一面怖い暴君のような恐ろしさを持つ。一面慈母のような優しい面を持つ。

この二面を西洋の文明は忘れていた。自然の恐ろしさを忘れていた。手を付けられない恐ろしさを忘れていた。

もう一回恐ろしい自然、これを例えて言うと富士山が噴火することは十分考えられることである。

それに対する備えを考えておく、その備えとは自然が怒っても大丈夫にしようという生活スタイル(リスクを最小限にする方法)を作って置くこと、そしてそれをいつも覚悟する。それが日本の自然観である。

日本は国土が狭く、ほとんど山岳地帯で、しかも地震大国である。一方春夏秋冬、自然豊かな国である。古来からある太陽崇拝、水文化を維持しこの自然を壊さない、共存する国に持って行くことが最重要課題で、このままでは地球が減びてしまう。梅原さんが提言するように、まず日本が太陽崇拝、水文化の大切さを示し、世界に向けて発信することがこれからの課題ではないか。核融合、核分裂の世界は太陽自身そのものに限ってほしい。そこで得られる超大エネルギーを地球上の人々は利用するのが自然の姿である。

日本のような小さな、自然豊かな国土の国ではなお更、原発の存在はむずかしく、存在させてはならない。

ー補足発言

太陽エネルギーの利用として、太陽光発電装置を静止軌道に建設することも一つの選択肢として提案したい。これには10t級の発電装置を運ぶ輸送手段が必要である、多額の資金が必要である。こうなると一国では実現不可、地球が減びないように日本がリーダーシップを発揮して国際間協力で20年以内に実現することを提案したい。

<参考>

“いちょうの実” 宮澤賢治作 :詳細は寵愛します。